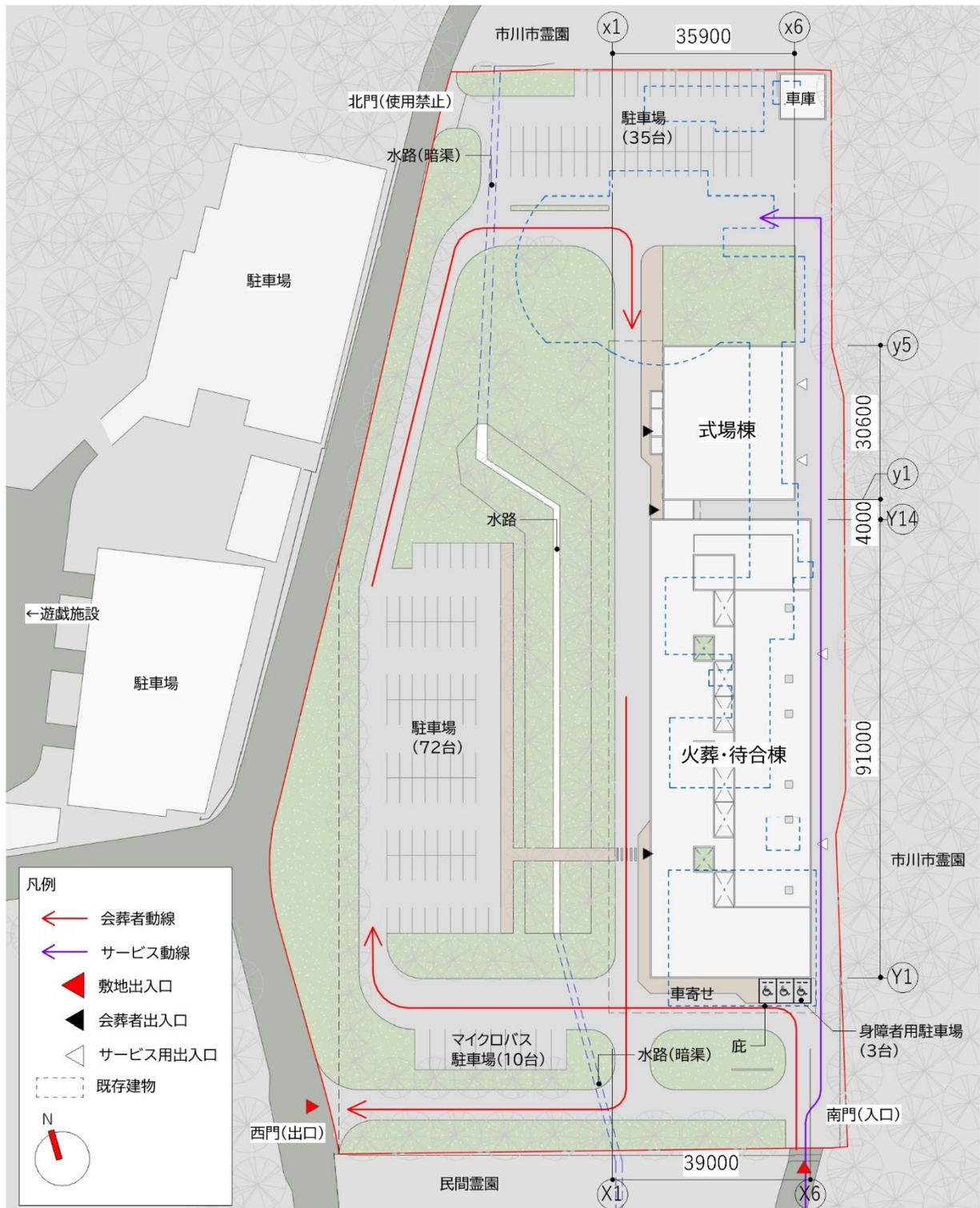


4 配置計画、平面・断面計画の策定

(1) 配置計画の考え方

火葬・待合棟の配置は、近隣施設や西側道路から見えにくく、現建物よりも目立たない計画とする。
 火葬・待合棟と式場棟は隣接することで、相互にアクセスしやすいよう配慮する。敷地内の動線は会葬者動線とサービス動線が交錯しないよう配慮する。また、敷地中央の既存環境を保全するとともに、周囲からの目隠しや修景として活かすことのできる計画とする。

図 4- (1) -1 配置図 (縮尺 1 : 1200)



(2) 平面計画の考え方

火葬・待合棟は2階建てとし、1階はエントランスゾーン及び火葬ゾーン、2階は待合ゾーンをまとめることでフロアごとの明快なゾーニング計画とする。会葬者出入口は南北に2か所計画し、敷地西側の駐車場からのアプローチと北側の式場との接続を意識した位置とする。建物内の動線は主に西側を会葬者動線、東側をサービス動線とすることで動線の分離を図る。

図4-(2)-1 火葬・待合棟1階平面図(縮尺1:500)

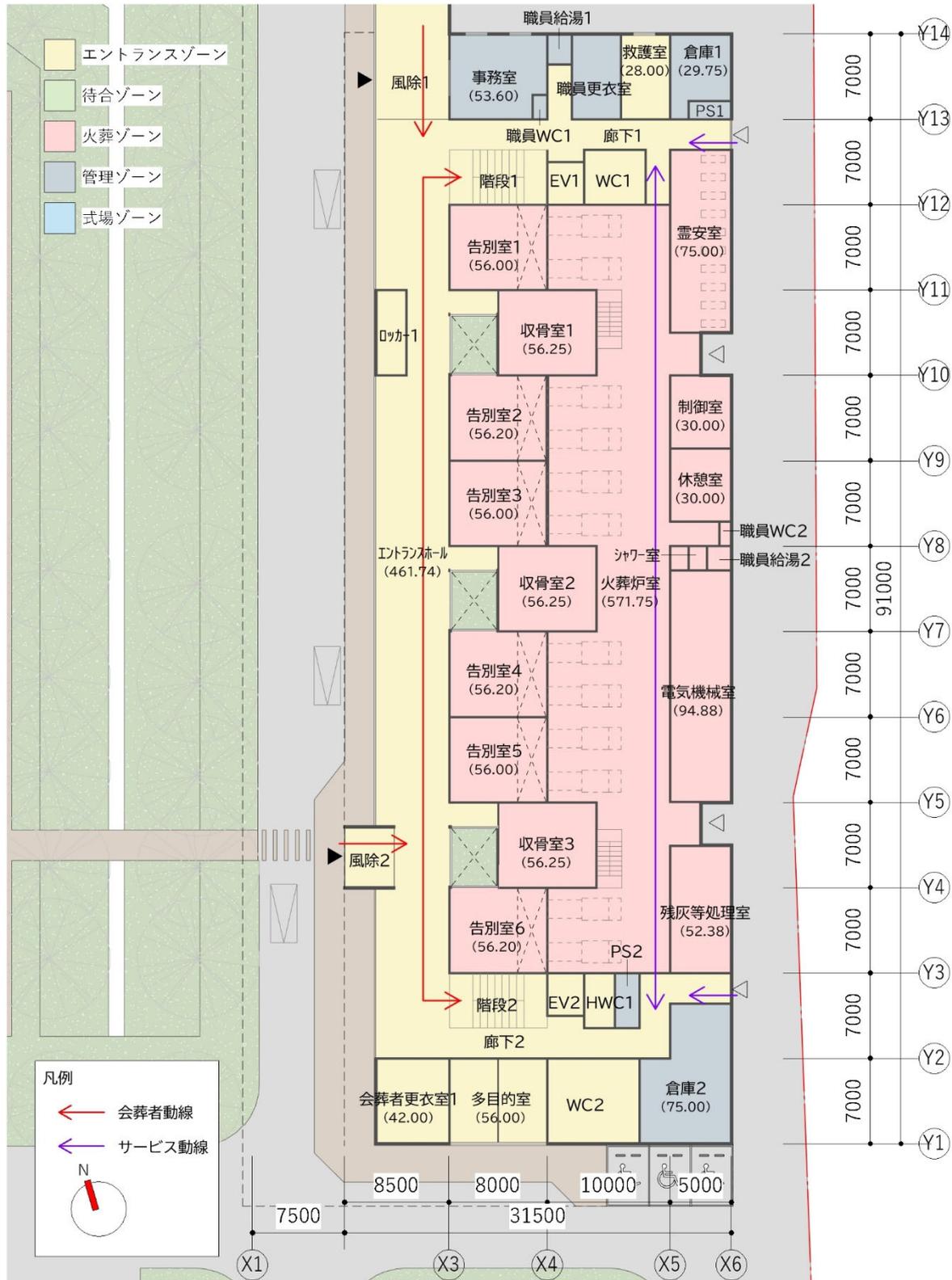
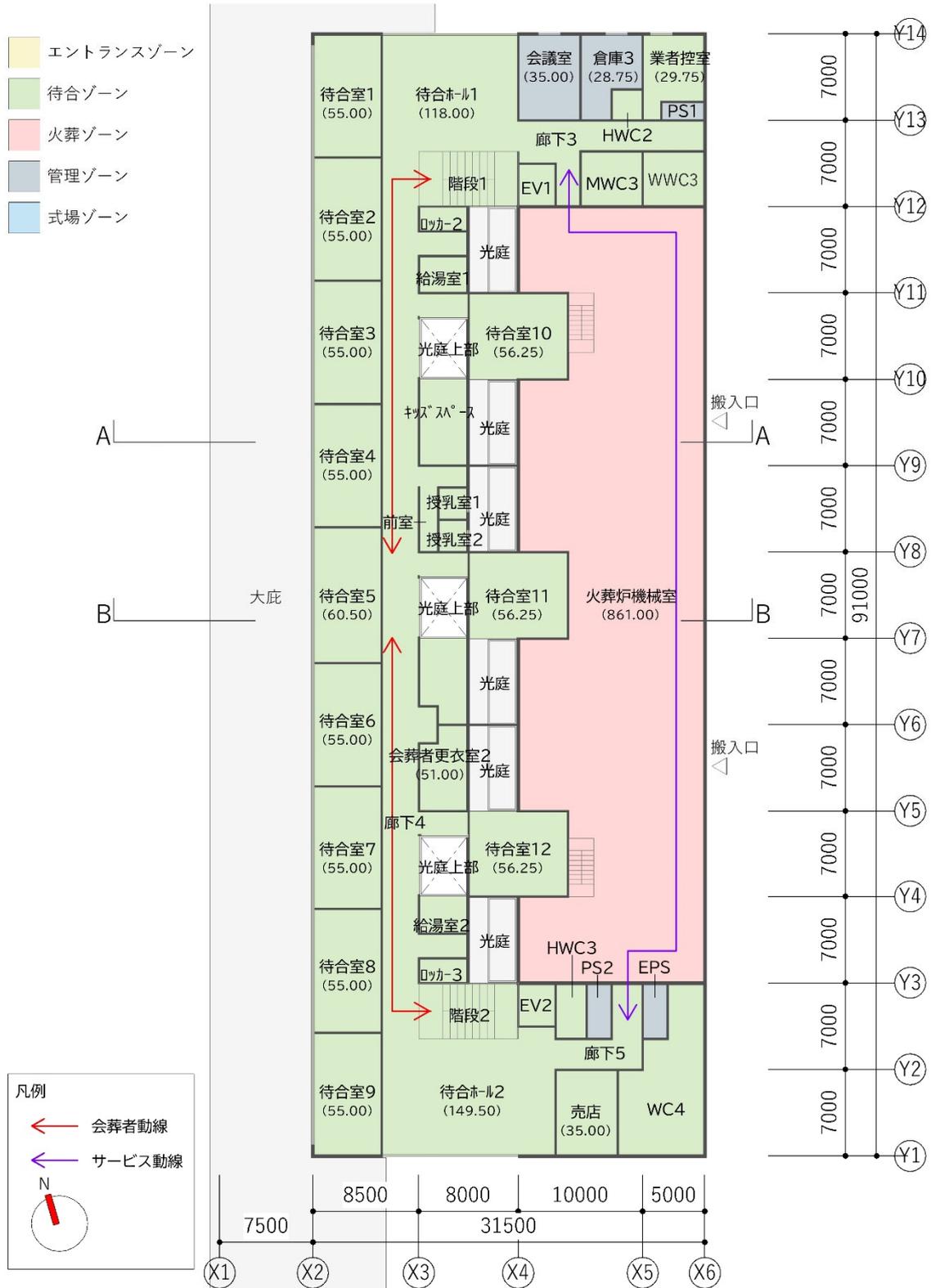


図4-(2)-2 火葬・待合棟2階平面図 (縮尺 1:500)



式場棟は会葬者動線とサービス動線の分離を図るとともに、火葬・待合棟との接続を意識した建物出入口を計画する。

式場は1階に100名規模、2階に50名規模を配置する。また、100名規模の式場は高遮音タイプの移動間仕切壁により50名規模の式場に分割できる計画とする。

図4-(2)-3 式場棟1・2階平面図(縮尺1:500)



(3) 断面計画の考え方

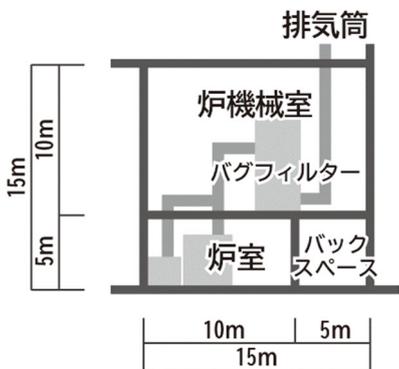
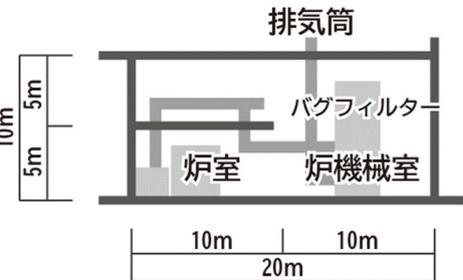
ア. 炉室断面計画の検討

炉室・炉機械室内には火葬炉の他、排ガス冷却装置や集塵装置（バグフィルター）、排気筒などが設置される。バグフィルターを含めた排ガス処理設備をどこに置くかは、斎場全体の断面計画に大きく関係する。

以下に炉機械室を1階に設置する場合と2階に設置する場合のメリット・デメリットを整理する。

本計画では敷地の制約条件により建設可能範囲が限られ建物をコンパクトにする必要があること、停電による冷却ファン停止時でも煙突効果による自然排気が行われやすいことから、炉機械室は2階に設置するものとする。

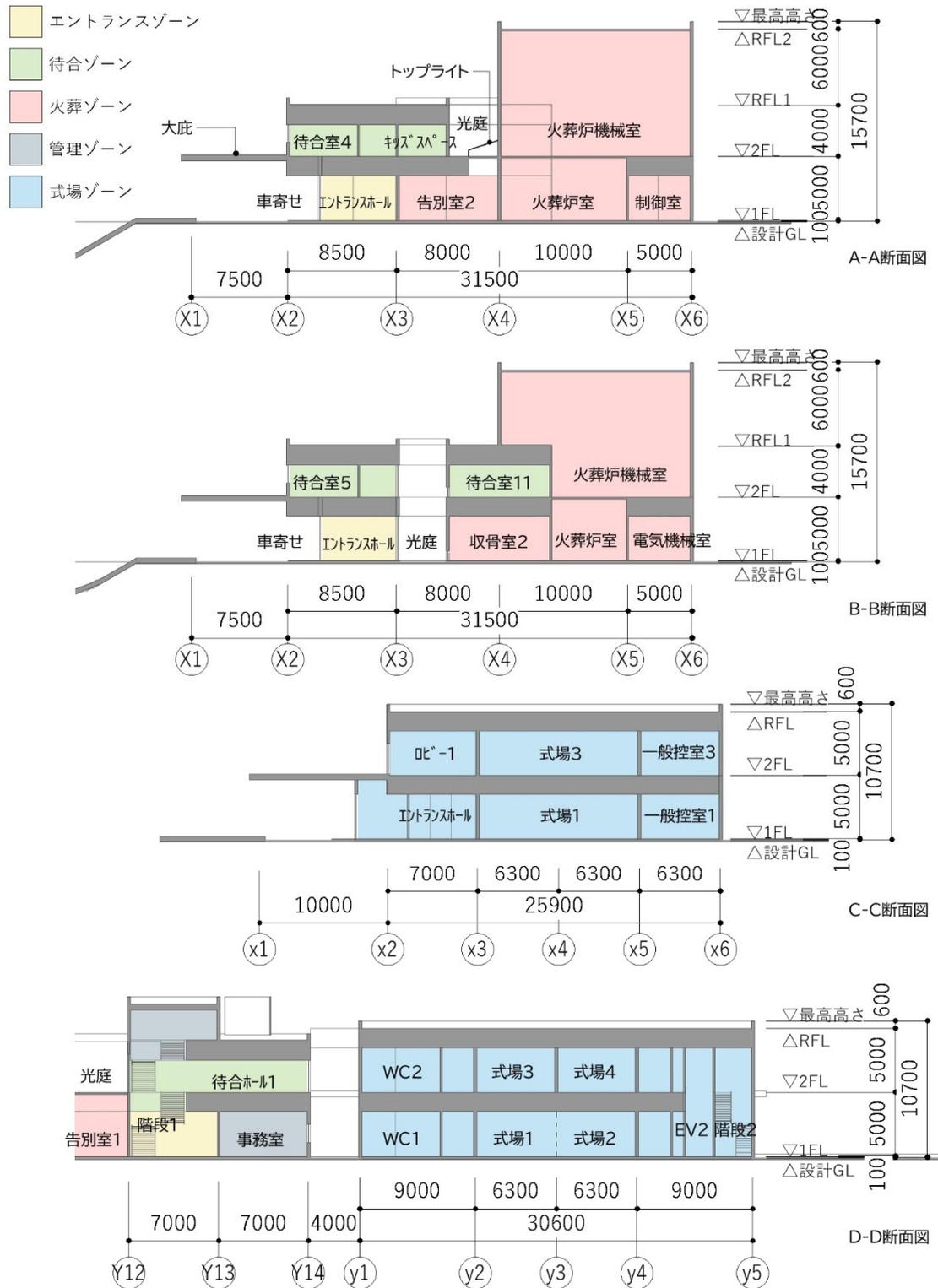
表4-(3)-1 炉室断面計画

	炉機械室2階設置案	炉機械室1階設置案
概要 断面イメージ	 <p>炉機械室を火葬炉の上部に設置する案</p>	 <p>炉機械室を火葬炉の背面に設置する案</p>
建物高さ 周辺への配慮	△：建物高さが高くなる。	○：建物高さを抑えられる。
平面計画 面積	○：建屋の面積をコンパクトにできる。	×：建屋の面積が大きくなる。 （近年の傾向として敷地がかなり広い場合でない限り採用されていない。）
施工性	△：他に比して搬入に手間はかかるが、問題になるほどの違いはない。	○：施工（搬入）が容易。
災害対応	○：動力盤等を2階に置けるので1階置きと比較して水害に強い。 ○：停電時の冷却ファン停止時には自然排気を行うが、より高い方に向かって排気経路が伸びているため、煙突効果により排気されやすい。	×：動力盤や機器を1階に置くことになるので水害時に復旧が困難。 △：停電時の冷却ファン停止時には自然排気を行うが、2階設置案に比べ煙突効果が得られにくい。
その他	○：火葬炉上部から2階排ガス処理設備へ配管を直上に伸ばすため、配管長が短い。	△：火葬炉上部から1階機械室へ配管を伸ばす必要があるため、配管長が他に比して長くなる。それに伴い空調配管や電気配線との干渉部分が増える可能性がある。

イ. 建物の断面計画について

敷地周辺に配慮し、高い階高を必要とする火葬炉機械室は近隣施設のある西側道路から最も離れた位置に計画する。その他の諸室部分は4~5mの階高を設定し、最小限の建物ボリュームとなるよう配慮する。また、会葬者の利用エリアでは、光庭やトップライトを計画し、故人との別れの場に相応しい建築的な演出を検討する。

図4-(3)-1 火葬・待合棟、式場棟断面図(縮尺1:500)



(4) 概略面積

概略面積を以下に示す。

表 4- (4) -1 概略面積

部門別	
エントランスゾーン	1000 m ²
火葬ゾーン	2230 m ²
待合ゾーン	1690 m ²
管理ゾーン	340 m ²
式場ゾーン	1620 m ²

棟別	
火葬・待合棟	5260 m ²
式場棟	1620 m ²
合計	6880 m ²